

【書評】

原 武史著『レッドアローとスターハウス —もうひとつの戦後思想史—』

新潮社, 2012年9月, 398頁

半 澤 朝 彦

本書は、ここ10年ほど原武史氏が手掛けてきた、団地や鉄道沿線を扱った「空間政治学」の成果の一つである。同様のテーマで氏は『滝山コミュニティー九七四』（講談社2007, 2010文庫化）、重松清氏との対談『団地の時代』（新潮選書2010）、『団地の空間政治学』（NHKブックス2012）も上梓している。空間やオブジェのもつ政治的機能という点では、『可視化された帝国』（みすず書房2001）『皇居前広場』（光文社新書2003）といった、それ以前の原氏の業績からも連続性がある。本書は、対象を西武鉄道沿線に絞り、精力的なフィールド・資料調査をベースとしつつも、肩の凝らない読み物となっている。本書で扱われている西武線沿線の代表的な団地については、『団地の空間政治学』の内容と重複する部分が多く、また、著者の主張に関する論理的・定量的な分析は、どちらかというと、そちらの本の方で明晰に整理されている。本書には多くの資料やエピソードの紹介があり、読者と共に物語を紡ぐという姿勢で書かれているようだ。

原氏自身、1962年に生まれてから13年間、この地域の団地をいくつか転居しながら成長したという。『滝山コミュニティー九七四』もそうであるが、原氏の「空間政治学」に読者を捉える力があるのは、感受性がとりわけ鋭敏な幼少期に感じていた「違和感」や「直感」をベースにしているからであろう。これは、私自身が学生に卒業論文などのテーマを選ぶ際に勧める方法の一つであり、また、プロの物書きや研究者にとっても、ライフワーク的なテーマ追求の王道と思う。もちろん、このや

り方をとると、自分の「直感」を信じすぎる危険も伴うのであるが。

本書は、東京西部に複数の路線を持つ西武鉄道の沿線を面として捉え、沿線住民の生活が、親米・反共主義の政治家で西武の経営者であった堤康次郎の決定にさまざまな点で依存していた反面、画一的で横並び的な住空間に住む住民同士が連帯しやすい団地が多く建てられ、ソビエト的、社会主義的な思想の土壌となり、60年代～70年代における保革伯仲や、革新自治体の興隆の一因になった、と論じている。ひばりが丘団地や滝山団地など、集合住宅における自治活動などの記述が大半を占めるが、団地ができる以前から存在した大規模な療養施設や、この地域から選出された有名な共産党国会議員である、上田耕一郎、不破哲三らの初期の活動も描かれている。

人間は社会的な動物であり、住環境や住む地域によって、行動やものの考え方が影響を受けるのは明白である。とりわけ都市部は、発展の経緯や社会経済的機能で人々の居住地が色分けされやすい。東京に関しても、下町気質、山の手文化などを扱った読み物や社会学の本は数多い。社会学では、郊外論や都市論はブームのようでもあるし、当然、そこでは消費パターンとかメンタリティも論じられる。たしかに、団地というものは、アメリカ的な豊かな郊外の庭付き一戸建てとは異なり、フルシチョフ期のソ連が大量に建設した狭くて画一的な集合住宅に近いに違いない。

実は私も、原氏とほぼ同時期に、やはり西武線沿線で生まれ育った。ただ、原氏が団地住まいだっ

たのに対して、私は、中村橋と鷲宮の間あたりの一戸建て（祖父母が戦前から住んでいた）に、両親と祖父母の二世代と5歳まで暮らした。その後、中央線沿線の武蔵小金井の一戸建てに父母に連れられて引っ越したが、武蔵小金井駅北口からは、滝山団地、小平団地、久留米西団地行き（西武バスが運行しており、ユネスコ村、狭山スキー場、西武園、ひばりが丘団地など、西武線沿線も生活圏であった。高校は、都立の国立（くにたち）高校に自転車通学した。つまり、本書や『団地の空間政治学』で扱われている界隈の生活に直接的な経験や記憶を持っている。

そうした個人的な感覚であるが、本書が強調する「ソビエト的な集合住宅に住む左翼的な西武沿線住民」という像は、やや意外な部分もあった。私のように団地に住んでいなかった西武沿線住民にとって、団地というものは相当に違和感のある存在で、団地が西武線沿線の典型的な居住形態という感覚はなかったのである。当時「カギっ子」「団地っ子」という否定的な含意をもつ言葉もあり、私を取り囲む大人たちの間では、集合住宅というものは、人工的で、何か非人間的な部分がある、問題のある住居環境であるという価値観があったと思う。団地以外の西武線沿線住民は、どちらかというと保守的であり、とりわけ、駅前などの商店街はそうであった。

本書にあるように、西武鉄道は踏切や駅前ロータリーの整備などに投資をせず、西武線の駅周辺は細かい路地が入り組み、独特のごみごみした雰囲気を持っていた。私はその雰囲気が好きで（あるいは幼少時の記憶に刷りこまれたためか）、武蔵小金井に引っ越してからも、街がすっきりしていることに馴染めず、自分で稼ぐようになってからは、再び西武線沿線に好んで住むようになったくらいである。決して東急線沿線のようなブルジョワ的な保守性ではないが、しきたりを守る商店街があり、神社や寺、鎮守の森があり、地主が幅を利かせる封建的な気風があった。西武線沿線の木造賃貸に住む人々が公団住宅の抽選に当たって喜ぶケースはあったが、本書にもあるように、その人々がこぞって左翼的活動に参加したわけではな

い。団地の生活に憧れた人もいただろうが、それが大多数かは分からない。「スターハウス」は数が少なく知名度がなかったし、「レッドアロー」など、小田急「ロマンスカー」に比べてはるかにマイナーでインパクトに欠けた。

本書には、社会学の郊外論にあるような統計的な情報はあまりない。本書は「思想史」という趣旨であるから「ないものねだり」かもしれないが、西武線沿線を全体として一つの傾向をもつ地域と論じるなら、どうしても読者は、「団地はどの程度まで西武線沿線を代表したのか」を知りたいと思うだろう。本書の一部や、『団地の空間政治学』にある数字から判断すると、団地住民が地域全体の住民に占める割合は、一部の例外的に割合が高いところでさえ30%~40%ということである。おそらく西武線沿線全体では、もっとずっと低い割合であろう。また、共産党の得票率は、全国的にみれば高いとはいえ、20%代が最高であって、共産党や社会党の国会議員が選出される一方で、自民党議員も選出されている。当時は中選挙区制であったことを忘れてはならない。団地や共産党は目立っていたかもしれないが、西武線沿線住民の典型とは言にくい。

もちろん、原氏の意図は、ナショナルで画一的な戦後思想史に異を唱えることであり、それは非常に成功している。ただ、西武線沿線だけを切り取っても、そこもまた、画一的な思想空間ではなかった可能性がある。ことによると、私がイメージする保守的な西武線沿線住民が「サイレントマジョリティ」だったかもしれない。その意味で、原氏のこれまでのどの著作でも扱われていないのではないと思うが、つくば研究学園都市を西武線沿線の団地と比較すると面白い気がする。東京教育大学を潰して筑波大学が作られた時（1973年）、とりわけ左翼の側からずいぶん批判があった。権力の側はきわめて人工的で管理のしやすい空間を作ったつもりだったが、いつまでたっても暮らしにくくて人が定着しない、伝統や愛郷心など生まれるべくもない場所となっている。その反面、人工的なビル群の外に眼を転じると、幕末に「天狗党の乱」を生んだような保守的な風土が広

がっており、おそらくそちらが「サイレントマジョリティ」である。

鉄道の沿線を単位にして思想やメンタリティ、社会のあり方を論じるという着想は魅力的である。本書や『団地の空間政治学』が指摘するように、西武線沿線の団地が（結果的に）ソビエト的になった一方で、東急線沿線はイギリスの田園都市構想に直接的な影響を受けている。東京のかなりの部分はクルマ社会ではないので、鉄道沿線単位で地域をまとめる意味はありそうである。また、イギリス、アメリカ、ソ連、という20世紀のグローバルな社会政策のロール・モデルを参照することで、ジョセフ・ナイのいう「ソフト・パワー」の概念で、国内冷戦と国際冷戦を論じることもできるだろう。

今後、政治学としては、鉄道を敷設し地域を開発する主体である西武鉄道、とりわけ堤康次郎の意図を実証的に分析する必要があるだろう。また、住宅公団と西武との関係も知りたいところである。住宅公団の側に明白な政治的意図があったようには思えないが、護送船団方式の金融システムにせよ、終身雇用や年功序列を目玉とする「日本的経営」にせよ、戦後日本の社会経済政策には、相当に非競争的で、社会主義的、保護主義的などころがあった。団地住民のメンタリティは、その意味で地域的「異端」というより、むしろ戦後日本全体を象徴していたのかもしれない。